

# 御名を唱えて

ガブリエル・ローゼンストック著

すみくらまりこ 訳

村田 辰夫  
監修

## 目次

(連番号 第二行目 ・ ・ ・ ・ 掲載頁)

三二二二十九八七六五四三二一  
 三一〇九八七六五四三二一

なんと疾く星たちは	・	・	・	・	7
きのう	・	・	・	・	8
この熟した果実を見よ	・	・	・	・	9
御身の姿はわたしの前の	・	・	・	・	11
あなたはまだわたしの時にはない	・	・	・	・	12
わたしたちは共に道を歩く	・	・	・	・	13
あなたのために夜の見張番となつた	・	・	・	・	15
わたしは物乞う者	・	・	・	16	
あなたのためにジプシーのバイオリン弾きとなつた	・	・	・	・	
年老いた桜の樹から	・	・	・	18	
このシラブルなしに	・	・	・	9	
あなたの姿を彫りたいと願う	・	・	・	20	
あなたのために交響曲を書いた	・	・	・	21	
あなたの戸口に来てノックして	・	・	・	22	
わたしはあなたより二歳年上で	・	・	・	23	
わたしは就寝中だつた	・	・	・	21	
アイルランドにはキツツキがない	・	・	・	20	
あなたはご自身を農夫の姿で	・	・	・	22	
わたくしは世界の果てまでいく	・	・	・	23	
夕闇が早く訪れた	・	・	・	24	
セグロカモメは	・	・	・	25	
いま	・	・	・	26	
3 4	3 3	3 2	3 0	2 9	2 8



七〇	六九	六八	六七	六六	六六	六六	六六	六六	六六	六六	五三二一〇	九八	五五	五六	五五	五四	五三	五二	五一〇	四九	四八	四七	
きよう私の心は石だ・・・・・	なぜヴェールは引き裂かれたのか・・・・・	狂犬が・・・・・	信じられないことに・・・・・	わたしは繰り数珠の免状をとつた・・・・・	わたしが沈思するとき・・・・・	あなたを牧草地に居させ給え・・・・・	ボプラがそびえている・・・・・	両手いっぱいひろげた・・・・・	影をつくる蔓は・・・・・	フォーケやナイフが傍の食堂で音をたてる・・・	高くそびえる松のうえで・・・・・	くるくる踊るイスラム修道僧の一団を見よ・・・	トランシルバニアの泥浴で・・・・・	シビエルにあるガラス絵美術館には・・・・・	有名なエヴァミルクを作つた・・・・・	馬のひづめの音が・・・・・	ハーマンの二羽のコウノトリが・・・・・	わたしはフレンネイへよろよろ歩く・・・・・	わたしは人の世から・・・・・	シンバタ・デ・サスの僧院巡礼・・・・・	もし猫を飼つていたら・・・・・	わたしは聖なる書を学んだ・・・・・	わたしは努力したあなたのため
64	65	69	67	70	71	73	74	75	78	78	79	79	80	82	83	84	85	86	87	90	92	93	

七一	わたしは魔法の踊りを習つてゐる	94
七二	あなたの血管で歌つてゐる血は幸せ	95
七三	わたしはスキーに行つた	96
七四	わたしは命令されていた	97
七五	わたしに話しておくれ	98
七六	あなたはかつてスカアハ	100
七七	彼らはわたしを部族の仲間にした	102
七八	さあ独りで事を終えるときだ	103
七九	あばずれの聖母が	104
八〇	あなたを求めて歩きまわつた	105
八一	もしもあなたが	106
八二	町のチンドン屋となつたことがある	107
八三	地上に落下する雀はいない	108
八四	あなたは知つてゐる	109
八五	わたしは念入りに調べてゐる	110
八六	わたしは放浪の聖人	111
八七	シマウマのように	112
八八	その名前を初めて聴いたときの	113
八九	ミラ星のように	114
九〇	彼らは冒涜する	115
九一	秋には感覚を失つた	116
九二	なにゆえに	117
九三	距離を保とう	118
九四	花瓶の花を	119
1	・	1
2	・	2
3	・	3

九五	わたしの友は蜘蛛だ	・	・	・	124
九六	あなたのために庭を造った	・	・	・	125
九七	バヤジットの	・	・	・	126
九八	今朝わたしは	・	・	・	128
九九	現象のなかにあなたを探す	・	・	・	129
一〇〇	元はといえばあなたの名前だつた	・	・	・	130
一〇一	わたしは砂漠のなかにいて	・	・	・	131
一〇二	魂の明るい今宵	・	・	・	132
一〇三	わたしはパブアニューギニア人だつた	・	・	・	133
一〇四	かすかな香り	・	・	・	135
一〇五	わたしはプロイセンの役人だつた	・	・	・	136
一〇六	ただただ思いの力によつて	・	・	・	138
一〇七	御目を開き給え	・	・	・	139
一〇八	風は終わりなく歌うあなたの手足の疲れを	・	・	・	140
一〇九	あなたの御目の中には太陽がある	・	・	・	141
一一〇	あなたのサギ師	あなたのコヨーテは	・	・	142
一一一	エピローグ一	舌が使えるようになつたとき	・	・	144
一一二	エピローグ二	いまあなたを呼ぶ名はないどころか	・	・	145
原作者ガブリエル・ローゼンストックについて	・	・	・	・	147
あとがき	・	・	・	・	148

\* 一  
オーマよ

なんと疾く星たちは帰途につけたのだろう

なんと遠くからかれらは旅したのだろう

空は星が降るばかり

あなたは灯かりを降らして

間もなく天は生れたばかりの姿になるだろう

\*オーマ（ケルト神話の軍神の娘で、伝承のなかで消えていた女神、  
言靈を司るところ。石像が発見され、詩人に靈感を与えた。原語では Dar Ḏ̄ma）

オーマよ  
きのう

わたしは探しにいつた  
あなたを  
そして見つけた  
あらゆるところ  
とりわけ

数えきれない

燕の飛行に  
暮れゆく空に  
彼らは願つて いるようだつた  
沈みゆく太陽を  
羽ばたきで  
めらめらと燃えたてようと

三

オーマよ  
この熟した果実を見よ  
いつもあなたのために落果している  
知らないうちに

この木の  
大枝はあなたのもの  
樹液をにじます  
その根という根に

香りはあなた

苔が樹皮にびっしりとまつわるのを  
わたしはしかと目にします

深く 深くその下にいつも  
あなたはおはします  
そこに  
あなたのなかでわたしが花開くのを  
待ちながら

歌う葉ずれの音楽礼拝

\* キル ターナ

<sup>\*</sup>音楽礼拝 キル ベンガルの音楽礼拝。ヴァイシュナビア宗派では通常の伴奏に合わせて歌われる詩に構成では、コーラスで繰り返され、ソリスト、打楽器、歌、ダンス、朗誦でくりかえし神の名（ナーマ）を呼ぶ。人間の魂と神。

オーマよ

御身の姿はわたしの前の

銀幕のなかで

つと大きくなり

やがて崩れて

忘却の銀河のようになる

わたしは戻り給えと呼び掛け

回復を待つ

無感覚の自失からの

小休止

わたしは知っている 星々は  
ただ消えるために生れ来るのを  
わたしたちが仰いでいるのは  
はるか昔に往った  
神々しい天体の光

わたしはこのことも知っている  
御身の光はわたしの内に輝き  
宇宙に怖れなど最早ないことを

五

オーマよ  
あなたはまだわたしの時にな  
一緒に食べたこともなく  
共に眠つたこともなく  
共に起きたこともない

わたしは三百時間も早く起きて  
夜中にトーストを焼き  
蜂蜜をたっぷりかけよう

月が窓を  
興味津々と覗くだろう

通りには  
都會の狼が  
餌を漁つている

その尾が  
暁の最初の光に触れている

六

オーマよ  
わたしたちは共に道を歩く  
アイルランドの西を  
大西洋の思念が  
足跡を書き消す

カワウソが川から  
わたしたちを見ている  
まるでヒトを見るかのように

あなたは芝の匂いを喜んで嗅ぎ  
羊の頭蓋骨に香を焚き込める

雲は消えゆくケルト語の痕跡のような  
模様を描いている

わたしは忘れ去られたフクシアを摘んで  
あなたの髪に挿す

音楽がパブから漂つてくる  
困惑させる錫笛

カラスがむさくるしい藁屋根に  
おどおどと止まつてゐる

あなたの見えない手をしつかりと握りしめる

オーマよ

あなたのため夜の見張番となつた  
無窮の時間をじつとして  
目をむいている

一度はうとうとしかけたけれど

あなたを感じ  
また用心しなおしたのだ  
鏡に向かつてしかめつ面  
チベットの仮面

もしこれを続けたら  
彼らはわたしを褒めて  
金の時計をくれもしよう

溶けてゆく

トーグ  
首環が

御身のうなじに  
かけられた

八

オーマよ  
わたしは物乞う者  
あなたは微笑みを惠んでくれた

わたしはうわ言を繰り返し  
有頂天となつて  
遠ざかつた

その後疲れて  
空腹になり  
座りこんだ

すると人々はわたしにコインを投げる  
わたしは彼らに背をむける  
わたしがつねに望んだのは  
ただあなたの頬笑み

オーマよ

あなたのためにはジプシーのバイオリン弾きとなつた  
そして朝な夕な奏でた

柳の影が落ちる夕べには  
長らく忘れていた

望郷のメロディーを奏でた

わたしは松脂色の白い鬚をのばし

食べることも忘れ果てた  
お針子がわたしを見て卒倒した

わたしはポルカの曲を弾き  
行進曲を奏で 緩やかなアリアをならし

聖歌をジグのように奏でた  
狼が丘から走つて下りてきて  
子供たちとふざけたりした

わたしは月や星に向つて  
風や雨にまで奏でた  
すると死者たちが墓場から立ち上り  
踊り抱き合うのだつた

\*ジグ　の　拍子の踊り

オーマよ  
年老いた桜の樹から  
わたしは風琴を彫りだし  
それを人々の目につかぬところに  
置いておいた  
タカがそれをじつと見ていた

人の指には触れず  
その優美な琴線には  
ただ風のみ  
それを鳴らす

朝のそよ風  
夜のそよ風  
南からの生温かいそよ風

一日中歌うのは  
あなたなのだ

言葉なく  
いとも容易く

二つとない音曲で

十一

オーマよ  
このシラブルなし  
に

一日は始まらない

沈黙の夕闇

丘を覆う霧

愛無き抱擁

野ガモが  
北へ折れて飛ぶが  
星は導かない

十二

オーマよ  
あなたの姿を彫りたいと願う

花崗岩にではない  
御身はそんなに堅くない

大理石にでもない  
御身はそんなに冷たくない

それは石灰岩に  
わたしたちの涙を吸つてくれるから

あなたを傷つけないよう  
ほんの一分だけ鑿のみを打とう

毎日 每日

目隠し布をして  
あなたの慎みを護ろう

十三

オーマよ

あなたのため交響曲を書いた

聴いてもらいたい

たぶんあなたのお耳に達しないかも知れないが

わたしは楽団と

厳しいトラブルを抱えているのです

トライアングル奏者は

わたしに思い出させるのです

かなりはつきりと

三角形には三辺しかないのだと

バイオリン主席奏者は悲鳴をあげます

「お前はここには存在しない

樂譜を書いた」

わたしは赤面し口ごもる

「そう だから

最高(ベスト)にね」

「柔らかに とはどんな風にだ」  
シンバル奏者がぶつぶつ言う

「シンバルをジャーンとならす それでいいか」

ああわたしには分からぬ  
わたし自身が演奏でもしない限り  
この曲は聴かれない今まで終わらないかと怖れます

十四

オーマよ  
あなたの戸口に来てノックして  
言う ここに居ります 確かめようと・・・

ぶつぶつ呟く

あなたは中に入ってくれます

ずっといられるのとあなたは訊く

永遠なるもの  
わたしは息を殺して口ごもり  
聴診器で  
壁を調べる

あなたは目を見張り  
いま何をしているのか分かっているのかと  
尋ねる 歌うように  
不死の声で

わたしは  
溜息をつき

壁の内に閉じ込められた声に向つて  
真夜中の礼拝  
もはや誰も歌わない讃歌

何か聴こえたわ ほら  
コンゴウインコよ きつと  
でもあなたは電話でお話中

警官も悪いことばかりじゃないよ  
牢獄の壁に耳を付けさせてくれるよ  
そしてわたしが大声で朗唱する時にやりと笑う  
地獄行きの失われたソネット

オーマよ  
わたしはあなたより二歳年上で  
あなたに因んで若い雌鳥の名を戴いた

騎手への教えは明らかのこと

「スタートの時

もしも馬が興奮して

汗ばんでいたら

降りて彼女の首を

芳しい草でこすつてやり

話しかけてやる

ささやいてやる

—薔薇色の白絹に泥をつけぬように—  
騒がしい観客から遠く離れて  
外側で競争させる

優しく動かせ

リズミカルに

彼女とひとつになれ

どんな状況であつても

あなたが鞭打て

彼女が勝利したときは  
トラック半周の余裕では  
ご褒美は  
甘い砂糖の塊』

後でいななく闇の中で  
わたしはあなたを洗い  
綺麗にしてあげよう  
馬小屋で  
廄舎のなかで

オーマよ  
わたしは就寝中だつた  
一匹の蛾が来てぶんぶんいつて  
開けてあつた窓から入り  
わたしの肌の下にもぐり込んだ  
わたしは動けなかつた

わたしの中のあなたの光が  
それを呼び込んだのだつた

オーマよ  
アイルランドにはキツツキがない  
(わたしの知っているかぎりでは)  
いちど聞きたいたのだ  
樹の上をコツコツコツとつつく音を  
わたしたちがあなたの神秘を叩くように

アオサギはいる もちろん

灰色の聖人  
ヨガの達人  
一本足で立つてゐる  
監視の目からは逃れられないくらい

オーマよ

あなたはご自身を農夫の姿で

顕現し

食糧と飲み物を

ご自分のテーブルに置く

パンはあなたの肉体に力をつけるもの

水はあなたの渴きをいやし

ワインはあなたの瞳を輝かす

わたしのパンは食べるためでなく

わたしの水はワインだが

それは両唇のためのものではない

彼に息子をもうけさせよう

この赤子はわたしの名前

わたしはあなたの乳をこの舌で味わいます

オーマよ

わたしは世界の果てまでいく

夢を見ていた

あなたを探し求めるためでなく

あなたを避けていた

護符を身につけて

白いチヨークで輪を描き

あなたの頬笑みを逃れた

赤いチヨークの内側の輪は

あなたの唇を逃れるため

わたしは籠つた言葉を早口で言い

空気は重たく

\* カバラの祭文のよう

するとあなたが歌うのが聴こえた

かたちも変えて

わたしは鬚の生えたネズミとなつた

あなたはまた見たけれど

目をそらした

わたしは家フクロウだつた

ネズミを狙い下りてきて

そして飛んだ

昼夜も

そして暗いところにやつてきた  
前より暗い時に  
わたしたちが会う前の  
あの時と場所に

\*カバラ ユダヤ教神秘主義の一つ。

オーマよ  
夕闇が早く訪れた  
あなたの光はどこ  
暗い雲の塊 |

先発隊が |

郊外に侵入する

脅かす大群が

雨の矢を降らし

風が急がす

どこかで蠟燭が点される

聖者のために

彼は居なかつたかも

噂話の尾鱗ひれだつたかも

希望の民話のまぜこぜだつたかも

また疫病の時代の幻影だつた

さて誰だ

どこだ

光を探す者は

黒い雨

オーマよ  
セグロカモメは  
繰り返し蟹をつまみ上げ

空中高く運び  
下の岩に

落とし

甲殻が粉々にこわれ  
それを見て満足する

むさぼられる肉は

一片も残されることもない

あなたはわたしを高いところに連れていく  
大気がひき裂かれているところに  
わたしはわたしの運命が  
あなたの飢にゆだねられているのを忘れている

オーマよ  
いま

ここで

このとき

あなたに近づくことも  
離れることもできない

\*アビはウオツチャード  
ある距離を置くことで  
知られている

あなたの血はアビなのか

\*アビ アビ科の鳥。

オーマよ  
誰も見ていないとき  
わたしは霧の池に潜水する  
驚きは無数の卵

尾をゆらし

言葉にならない卵割\*らんかつ  
驚異の足が生える前の

陸の冒険とともに  
ヨガの浮き術が成功した

あなたの目に映る  
木々の世界  
谷や山が  
上がり下がり

時々は静止して

\*卵割 受精後、胞胎期までの胚の細胞分裂をいう。

オーマよ

とぐろを弛めた蛇  
雷撃を受けた樹に

わたしはあなたを見つけた  
なぜわたしは逃げるべきなのか  
わたしはあなたの目に吸いこまれてい  
る

わたしのすべてを奪つて下さい

慈悲深く

わたしはあなたを支えましょ  
う  
ここわたしの頭はあなたの頸に  
あなたの毒牙を用いすとも  
わたしを氣絶させずとも  
わたしを生かしたまま  
いまあなたの中の死だ  
一寸一寸 ゆつくり

オーマよ  
いくたの聖人や  
高貴な者がひしめきあうー  
肩越しに読者が  
次のひとことの  
声を聴こうと

それぞれの方法で  
わたしに耳打ちし  
見つける手助けをする  
言葉は入口を  
あなたのこころに響くリズムの入り口を  
それは紛れもないバベルだーきつと

最後に

わたしは寂しい塔の  
その高みへすべて消し去る

静寂のうちに詩をつくり  
一本の指でそれを集め  
わたしはあなたの名前を打ち込む

オーマよ

わたしはあなたのため山羊飼いになつて  
居なくなつた山羊を探している

どこにいるのかな

時々姿を見るように思うが

それは苔の生えた岩

人々は歌いつづけている

わたしの山羊追いは古いやり方  
ところどころは忘れられている

わたしは最早や独りでやつてゆけない

あなたが来て下さい

わたしたちの技を出し合いましようよ

聞き耳をたてよう、わたしは言う「だめだ、  
あなたの聴いているのはダイシヤクシギだ」

オーマよ

だがあとであなたは叫ぶ

「見て！山羊のひづめの跡よ」

あなたは一目散に走り出す  
地平線低くにいる太陽が

あなたの踝に快く当たる  
最後のチャンス

わたしは山羊を追つてているのか

わたしたちは喜ぶ  
群れを見つけたときに

わたしたちは一緒になる乳母の乳を絞る  
篝火に照らされながら

ふざけるように乳首を交換して  
バケツの乳を  
白い笑いを振り散らす

オーマよ

厳しい練習の年月のあと

師匠から弟子へと

呼吸法が伝えられ

綿密に規正された食事

女も酒も絶ち

ついに資質を備えるに至る

あなたへの深い低音担当者としての

昨日の夜がわたしのデビューだつた

わたしは『詩曲 オーマよ』を歌つた  
錯乱したナイチンゲールみたいに

観客は花束を雨嵐のように投げてくれた  
それを後ろに放りあげた

「静かに」とわたしは

深遠な口調で大声をあげた

(静寂のなかであなたを感じた)

「この花束は彼女のもの 彼女のもの！  
わたしの声を作ったのは彼女

あなたたちの杖を掴め サンザシの枝を

彼女への巡礼のため ブーケと花をつけよ

彼女の首や足元に

薔薇の飾りを置け

彼女こそがあなたたちの興奮の源

わたしを通して歌つたのは彼女なんだ

野性味たっぷりにメロディアスに

ねぐらのなかの徵の歌

そのとき潮は満ちみちる』

二八

オーマよ

蠟燭が燃えている

白い身体が溶けていく

あなたは炎

あなたは身体

わたしたちはともに燃え盡きねばならない  
最後の爆ぜ炎へと

空気の芯を甜めないところまで  
わたしたちは生なを捧げ  
わたしたちが居なくなつても

蠟燭は燃える

その白い身体は溶けていく

オーマよ  
わたしはあなたの泣き姿を作らせ  
わたしたちの聖堂に納めた  
奇跡は知らされる  
盲目の人々は見えるようにな  
聾の人々は聽こえるようにな  
足が悪い人も歩けるようになり  
すべてのなかで大事なことは  
愛の薔薇が飾られなかつた人々が  
いあなたを思い涙する

三〇

オーマよ  
わたしは古代学者となり  
あなたを見つけた  
化石のなかに  
蔓に覆われた遺跡  
墓 破片 骨

古代の僧院に  
詩人たちは埋葬され  
あなたをいまだ夢見て  
乾いた言葉で  
歌われぬ詩を作り  
地面いっぱいにばらまき  
タデ草の悪臭をたて  
クリスマスローズに匂いをつけ  
イラクサの薔薇に棘をつける

オーマよ

鶴が

夜明けに泣く

糞の山から

あなたの美が開き

丘や渓谷をわたる

なんてしつかりと彼は立つことか

首を弓なりに反らせて

とさかを震わせる

その赤さ

いま明けゆく空に

あなたの名前を呼ぶ

オーマよ  
わたしは静寂をつくりだす  
行く先はどこであれ  
しづしづとあなたは来る  
わたしはこの世のものに  
耳目を閉じる  
わたしの唇も

ひとがどちらの方へと問えば

月の凸面をさす

ご機嫌いかがと問えば

月食の尖りを微笑む

誰かが時間を尋ねたら

そのひとはわたしの瞳に見るだろう

オーマの時を

祈り

讃える好機の時を

造化のものはすべて  
雰囲気を醸し出す  
昆虫はすいすいと飛び

その動きは枝を  
さらさらともいわせない  
わたしは鼓動の音も聞かない

遠い陸地で

あなたは音もなく動く

陽光はやつれた山肌に  
さあつと差し  
野兎はぴんと耳毛を立てる  
あなたは聞き耳をたてる

オーマよ  
あなたに夜着をデザインした

魚の皮製だ

鱗うろこが光る

星々のなかを

あなたが歩き回るときには

星々らも

その反射光には驚く  
これは新しい銀河  
わたしたちを照らし出す

問題を抱えた星

彼らは今知ったのだ  
彼らの光は永遠でなく  
衣を奪われているのだと！  
灰であなたのからだを覆い  
虚しい哀しみに沈み  
自らを慰めている

オーマよ

わたしは子供の時に見た

黄色いホオジロを決して忘れない

石壁のなかにあつた小さな雛の巣

喉からはやかましい声

さぞお腹が空いているのか

暗いプロテスチント教会の傍だつた

そこは入ることが禁じられていた

神はその時黄色にあなたがいま見ているその色の

姿を示していた

キンポウゲの花粉

サクラソウのきらめき

あなたはそのホオジロだつた

苦むした石壁に身を隠していた

わたしたちは初めて

別々の世界から

お互いを見交わしたのだつた

オーマよ

あなたに沈黙のカラスを遣わそう  
この世の暗い物語とともに

戦争や

飢餓や

希望の失墜が  
彼の羽根を撫で

彼を説得し あなたの瞳を見させよう  
彼の黄色い嘴に

指を添えよう

そうすれば彼は再び歌うかもしれない  
そうすればまたあなたの御名が聴けるかもしれない

オーマよ

古の階段を昇る

わずかのコメをついばむ

わたしは道教士タオイストとなり

百の妾おんなと添い寝する

そこではあなたの出る幕もなく

あなたの御顔は視界から消える

だが沈黙は閉ざされてはいない

鳩の呻きや鯨の息づき

かつてわたしの唇に御名はなかつた

でもその名はあなたのものだつた

抱き締める腕がないのに抱いてくださつていた

オーマよ

あなたの沈黙から

あなたのさなぎが現れる

わたしがなにを考えようと

あなたのところへ飛び帰る

触れている

あなたの頬はいまわたしに

行くも帰るも

あなたの窓は

わたしに

わたしはそこに  
夜はあなたの枕もとに

あなたの夢を通して

夢見ぬときもあなたのうちに

わたしは朝だ

あなたの睫毛が

開くのを  
認める

オーマよ

しばらく本を閉じて

テーブルのうえに置いておこう

花のそばに

あなたのもとに行く他の道を  
思いみるとき

そこはとても遠いが

たつた一日

夜のうちにのようにも思える

あなたはハシバミの一部

わたしの案内人であり仲間だ

そこにはあなたに逢えない辛さが

あなたに逢える辛さがある

わたしは探検者の生き方を

冒険を読みとろう

彼らの勇気や策略を真似

嵐や海賊に向かおう

干ばつ洪水

地図にない領土

失った知識

\*ベドウインのように海に出よう

\*ベドウイン 中東、北アフリカの砂漠に住む遊牧民の総称。

オーマよ

わたしは郵便局へ行つた

「局長に会いたい」と言つた

彼は出て來た 恭しく

「貴方が局長さんですか」

「ジヤラルデイン・ルミ 担当者でござります」

「ではこれを見てください

ルミさん特別配達を願いたい

わたしをモンテヴィデオまで今すぐに送られたい

「それは無理です あなたは太りすぎています

ともかくウルグアイで投函されることですね

危険物 なにか遺失物 盗難物じやないでしょな

わたしはどうなりつけた

彼は憐れんだのか

くるくる回りだした

ダルビッシュダンスを見たかのよう

長い時間が過ぎて

彼は正気をとりもどし

「エフェソスへ行け」と言つた\*

「そこで洞窟を見つけたら百八十七年間の眠りにつけ……と

だからわたしはそこにいて  
とてつもない眠りについている

\*エフェソス トルコのエーゲ地方にある古代の都市遺跡

オーマよ

わたしは優秀な医者のところにいつた  
中毒代替療法の著者だ

かれはヘロインを渡し

わたしの状態を綿密に驗べた

「クスリより彼女を切望していますね」

わたしは思慮深く頷いた

彼はLSDを渡した

「何が見えます」

「黄色い満月が空いっぱいに輝いていて  
それぞれ軌道を描いている

その光りの筋はクジヤクの羽根のようで  
ブレスト島の

野生リンゴの樹に降り注いでいる

その味は乾いている

「彼女の姿は見えませんか」

「わたしは一体誰のことを言おうとしているのか」

医者は途方に暮れた  
宇宙も途方に暮れた

オーマよ  
ベニスのよう に緩やかに  
わたしは沈んでいくのだ  
あなたの美の中に

ドアのところにひたひたと打ち寄せる  
あなたの優雅さ

そのときわたしは沈みゆく  
あなたの頬笑みの泡立つ輝きの物語の中にか

オーマよ

今宵たつた一羽煙る空に一羽の燕が

虫を追つていた

仲間を失つていたのだろうか

行くでも来るでも

なく—

その滑稽な動き

ひさしの間を

だんだん小さくなつてゆく弧こを描いて  
自分の啼き声を追つかけて飛んでゆく

オーマよ

かんぼく

木々や茂みや灌木に広がる

漠とした緑が

わたしに確信を与える

あなたは心知らずではない

わたしの熱っぽい心を防御している

威厳ある野生のもの

あなたはわたしを必要とする

あなたを言葉で潤すために

言葉はあなたに注がれ

あなたの根を湿らし

そしてわたしの根も湿らす

オーマよ  
過ぎ去つた世代をごらん

大志や希望

簡素なる世間体の

モノクロ写真

それらのなかにわたしの裏切られた母が

子供に囮まれただひとり

ネックレスをつけ

ノックするファティマから離れた

\*宿なしのように

亡靈を待つてゐる

わたしはその母の子  
わたしの両脇の手は  
あなたが現われるのを待つてゐる

\*ファティマ　ポルトガルの都市名。一九一七年に起こったとされるファティマの聖母の出現で有名。

オーマよ  
際限のない雲のかたまりが  
街の明かりでピンク色  
ひと知れず渡つていく  
虚ろな空は  
深さのしれない闇に裂けている  
あたかも氷河時代が始まつたよう  
わたしはあなたの美のことと思わなかつた  
あなたの全能  
永劫にわたるあなたの力にうち震えた  
あなたはまばたきひとつで  
わたしなど簡単に潰すことができる

オーマよ

あなたを探すことからやりなおそう

この舟はトランシルバニアで浸水

どれだけ動きにくいか

あなたからあなたへと

行きつ戻りつ

意志の野生の馬

ひとつになろうとするが

お役御免のサークัส団の人たちがいて

わたしに教えてくれると約束した

とんぼがえり

綱渡り

あなたの知る技を

あなたを喜ばす技

そしてわたしが火を吹きあげるのを見ている

あなたの存在の炎を

\*トランシルバニア ルーマニアの高原、カルパチア山脈と南カルパチア山脈に囲まれている。

オーマよ  
きょう私の心は石だ

浜辺の小石  
あなたはかつて歩まれた  
遠い昔に

とつぜんの温かさ  
あなたの足の裏の肌

もつとはつきり憶えている  
空より

海より

歩まれよ ここる平らかなお方  
歩まれよ この浜をふたたび

オーマよ

なぜヴェールは引き裂かれたのか  
なぜわたしは御顔を見たのか

どんな狂気が

わたしをこんなにしたのだ

わたしは内奥で血を流している

すくなくとも聖痕主義者なら  
見せる傷があるが

暗いお方よ 疾く  
ワゲワシを遣わせ給え

オーマよ

狂犬が

どこかで吠えている

冥界で

\*ケルベロスと共に

あなたの獰猛な目は

なにかを見据えている

うなる歯

ぼさぼさの毛

ノミに噛まれたみすぼらしい垂れ耳

裏切りの古びた野良犬

あなたはその熱にからぬよう

愛しいお方よ 語っているのは誰か  
死靈はわたしの魂に住みついていた

\*ケルベロス ギリシャ神話の冥府の番犬、三つ頭で、へびを尾に生やし、胴体にも無数のへびの頭が生えていたともいわれる。

五〇

オーマよ  
信じられないことに  
恩寵がわたしに降り注がれた  
もつとも暗い時に  
上からか下からか分からなつたが

栄光は降りてきて  
閉じた窓を叩き

狂わしいほど透きとおり  
からだを離れたあなたの愛  
わたしはもう囁かない  
あなたが触れることを求めて

愛の樹は伸びていく  
その影にわたしは座る

夜が歌う

\* ガザル  
無月への叙情詩

\*叙情詩（ガザル） 本来アラビア語の古典的な詩型の名称で二行が韻を踏んで繰り返される。ペルシャ語、トルコ語、ウルドゥー語の叙情詩の重要な形式として発展した。

オーマよ

わたしは繰り数珠の免状をとつた

玉を繰るとき

玉は御名を唱える

摂理はゆき届いている

今まで聞いたことのないところから  
アテナイ人が悩みの数珠玉よりも好むもの  
あなたはこうした創造 生産 豊富さを  
引き起こす

すでに自由に焼き上がつた数珠束が  
ウランバートルまで来るのだ  
地球上で雪に覆われている他の場所へも  
あなたの温かさを必要としている処へ

オーマよ  
わたしが沈思するとき  
金魚はとつぜん  
あなたになる  
そんな秘密の  
またたきの鍊金術  
あなたはじつとしている  
身を呈するように光る  
なんという浄化だ  
水はこんなにも  
静謐となり  
あなたは銀色の水に泳ぐ

五三

オーマよ  
あなたを牧草地に居させ給え  
びりりとした薬草を  
こどものように食べ  
すっぱいサリート呼んでいた  
素直な日々にあなたを見出す  
雌鶏は気ままに鳴き  
地面を引っ搔いている

ニワトコからインクを絞り  
詩を夢み  
あなたに捧げよう

わたしが最初にあなたを見つけたのは  
鶏卵のなか  
丸くて温かい

わたしは思わず叫んだ  
世界はこうなんだ  
こうに違いないと

女たちもかつてはそこにいたが

きっと戻りますとの御声を  
わたしに聴かせてくれなかつた

何度も何度も呼びかけた星の女ひと

いつも居ないあなた 風草の女ひと  
わたしが遊んでいるとき敵から隠してくれ  
わたしが去る時わたしを導く大地の女ひと

オーマよ  
ポプラがそびえている  
目立つよう立つて  
いる  
道端に並んで  
幾マイルも幾マイルも  
期待を膨らませて  
まぎれもなくそうなのだ  
あなたは名譽ある警護の人だ  
そしていまあなたは現われる  
一本一本と  
熱気のうちに斃れていく前に

五五

オーマよ  
両手いっぱいひろげた  
裸足のジプシー少年が  
物乞いの文句を繰り返す  
柔らかい声を  
空中へ  
あなたへ

五六

オーマよ  
影をつくる蔓は  
葡萄の房を小さくする  
太陽のもとよりも

わたしはゆつくりと熟す  
あなたの影のもとで

わたしは無数の房

御身の涼しさのもとで生る<sup>な</sup>

言葉なく空中に吊るされて

五七

オーマよ  
フォークやナイフが傍の食堂で音をたてる  
軍隊の食事を作っているのだ

御身のためマーチを鳴らさせておくれ  
トランシルバニアの太陽のぎらぎらメダル  
高らかにまた低くマーチを鳴らす  
あなたの自由を宣言する

わたしはあなたを永遠に護る  
スズメバチから  
悪魔の馬車から  
さそりから

たつたひとりの軍隊だ  
わたしを見よ 前進だ  
そして後退だ

後退だ  
進軍だ  
一日中

今夜は  
野営だ  
たつたひとりで

わたしは新しい驚異の策略にうつてでる  
エクスター戦法だ

明日あなたはわたしの傷を手当てし給う  
オクナの塩浴で

\*オクナ ルーマニアバカウ県シビウにある湖、温泉、岩塩で有名な観光名所

五八

オーマよ  
高くそびえる松のうえで  
カラスがあなたのために羽繕う

美しく鳴く鳥を夢みつつ  
あなたの名前を褒め称える

他の鳥の優美さで翔け  
内なる変容を果たして

自然の巣は  
綺麗に整えられている

耳触りはいまや過去のこと  
その鳴き声は澄んでいる

オーマよ

くるくる踊るイスラム修道僧の一団を見よ  
ダマスカスからきたのだ

ひとりの未熟な若者

まわるマシュルームだ

われらの師は何という  
マウラーナは

マシュルーム

徹夜で跳ねよ  
こやしで太れ

といつたのか

わたしは書きたい  
あなたのためマシュルーム歩格の詩を  
跳ねあがる語法  
わたし自身の堕落から  
白い言葉

回転し

そして静止する

六〇

オーマよ  
トランシルバニアの泥浴で  
からだを真つ黒にした

油ぎった泥

\* ガーネツシユ風に微笑む  
泥は日光でケーキ焼きだ  
象の肌色だ

あなたを支える仕事をする  
森から切り出す丸太のように

わたしの過去のすべてが  
散らかり

裸で横たわっている

わたしは踏みつぶす  
それが何になろう

そつとあなたを下ろす

あなたは立つ

誰も立つたことのないところに

あなたが凭れると  
象牙色の静寂

\*ガーネッシュ ヒンドゥー語の神。障害を取り去り、財産をもたらすとされ商業の神、学問の神と崇められる。

六一

オーマよ

\* シビエルにあるガラス絵美術館には  
ワインとキリストの画想がある  
多くの蔓のなかのひとつ蔓がわたしたちを  
神秘と結び付ける

墓石があり

悲し氣にユーモア風に傾いている

林檎の木が

あなたのからだを味わえと乞う

外では哀愁のガチョウが

今にもと待つてゐる

彼らにわたしの存在の核心を投げつけたら  
あなたのあとを追つていく

\*シビエル ルーマニアのシビウにあるトランシルヴァニアの典型的な村。ガラス絵イコン美術館が有名

オーマよ  
有名なエヴァミルクを作つた  
チーズを作つた あなたのために  
人々が遠く近くから  
それを見にやつて來た  
ダイアから來たのだ  
スマモのたくさん採れるところ  
小さな屋根のシウラマイカから  
黒海のコンスタンツアからも  
小悪魔ストリゴイが  
それを盜もうとした  
御名を唱えた  
彼らはムクドリのように散つていつた

オーマよ

馬のひづめの音が

遠くから響き

喝采のように鳴る

ダイアの丘のあたりに

プラム酒ですこし酔つた

長い夜

あなたへからだを伸ばす

はぐれ犬がわたしを見る

トマトは弾けてしまいそう

わたしは太陽の下にながくいた

野花が

小さな蠅燭が

あなたの祭壇を燃やす

夜に

リュックを背負ったジープシーダーが

丘から下りて旅回り

オーマよ  
ハーマンの二羽のコウノトリが  
地元の風景を見届けている

男と女が  
忙しく教会を整え

中庭を綺麗にする

聖母被昇天祭のためだ

式服は広げられている

日光と外気に当てられている

木製もガラスもきれいに磨かれて  
光っている

ミカエルとガブリエルの確かなまなざしの下で

生垣は葉が整えられ  
小枝が集められ

焼かれる

哀しみに手を差し伸べる死者の村

古代からの風見台から

二羽のコウノトリが  
奇跡を見ている

オーマよ  
わたしはフレシネイへよろよろ歩く  
異国趣味のため  
バツソ||プロフンドから  
ファルセットへ向きをかえる  
悪魔の尾の振りのように  
わたしの悪魔は軍団だ  
交通渋滞の抜け道を行く  
あなたの半分はまだわたしのもの  
わたしはぐいっと  
わたしの目を回す

## 三日目の夜

舌は顎まで垂れ下がった  
あなたの残り半分がすっかり注ぎ出された  
アコードィオンで演じられる  
バーレイを揺らす風のように  
牧師の顔から汗がひろがる  
それは顎髭にたまり  
氷柱に変わつてしまふ  
次の約束を頼むときだ

オーマよ  
わたしは人の世から  
自分を切り離し  
でもカラスではないので  
時は呼び返せない  
カラスの郷にもいられない

独り翔ぶ行路

集まる

彼らの沈黙

使われない井戸

御手のそば

その近さに

わたしがいる

取り残されたわたしが

朝には臆面もなく

夕方には型どおりに

屋根のうえに影をつけ

彼らは巧みな腹話術を

隠しながら

尾の羽根を曝け出し  
「ほら ここにいるよ」

立ち聞きすまいとした  
彼らの親密な会話を  
しかし引き込まれてしまった

カラス一分かるかー  
喧嘩声 ララバイ 哀しみ  
文法の微妙さ ニュアンス  
カラスのことばはわたしの母語だった

オーマよ  
シンバタ・デ・サスの僧院巡礼  
聖母被昇天祭だつた

こころは絶不調で

毀れていた

スマモの実みたいな旧教尼の黙行

髭の僧

最高齢の面々

紙の切り抜きに書いてある

祈祷に必要な者の名

生きているもの 死くなつたもの

死にかけているもの

聖頌歌を歌い唱文をとなえる  
宣伝屋のような叫び声で

キスされたイコンよ

何度も何度も

あなたの唇は乾いているに違ひない

オーマよ

もしネコを飼つていたら

名前は

影子シャドー

月がめぐる庭を歩き回るから

エジプト人はネコが死んだら  
眉毛を剃るという

あなたはこつそりと去り

わたしのところへ戻つてくる

猛々しい愛情で

胸を高鳴らせて

古の熱狂でわたしを引っ搔く

ゴロゴロ声

スタンザの合間合間の

あなたの気持ちを知る

少しの時間だけれど

煙突を降りて

あなたのからだは

全身が煤すす  
その意味をだらけ  
なる

オーマよ

タイアン シュ

わたしは 聖なる書を学んだ

天空の書

明け方から

雲り空に泣く象形文字

一気に書き下す

意味のない黒い涙

不機嫌な滴り

残骸の積荷

長く失った存在

わたしは筆をもう一度つかむ  
沼炭地の檉よりも黒いその雲

わたしの手はすばやく動く  
ひと筆またひと筆

黒い百の影

七〇

オーマよ

わたしは努力したあなたのためには

興味深い神秘主義修行僧になろうと  
でもわたしをご覧下さい

キリスト教国の熱狂じみた道教士  
ウチ・インーピス

修行を行なうわたしをご覧下さい

初めは虎だ

それから雄鹿

次は熊

さあ猿だ

最後は鳥だ

つぎつぎに変化し

あなたのなかで

虎があなたに忍び寄る

雄鹿があなたを護る

熊があなたを嘲る

猿があなたを笑わせる

鳥があなたの自由を嘲笑る

\*スーアイズム イスラムの神秘主義。

オーマよ

わたしは魔法の踊りを習つてゐる  
ユピとして知られてゐるあれを  
最初に考え出したのは

鳥を見たときだ

小石をつつき割ろうとしていた

その行程は簡単なもの

わたしは生涯

希望もない試みばかりだつた

小石の中に入ろうとした

少しばかりかじる穀物があつた

パン屑 木の種

敏感な鳥がするよう

だが、いや、

わたしは嘴をすり減らしていた

規則的に小石をつつく

震動が起きる

脳がゼリーに変わる

嘴もなく脳もない  
わたしを入れてくれる籠などあるのか

オーマよ  
あなたの血管で歌つて いる血は幸せ  
わたしを温める  
あなたの目のなかの光は幸せ  
道を示す  
あなたの顔に浮かぶ頬笑みは幸せだ  
頌歌を造形する  
こころは幸せだ  
織られたわたしのことばが織られるのを信じて いる  
あなただけのハンモック  
さあゆつくりおやすみ  
よい夢を見て

オーマよ

わたしはスキーに行つた  
雪にあなたを探した

空気は薄く

唇を温めるため

御名を繰り返した  
山々や谷間に向かつて

夕方に雪が降つてきた  
すると馴染んだ目印が消えた

これはよくあることだ  
わたしは進路を失つたまま生まれたのだ

冒険すべきでなかつた  
磁石も置きっぱなし

冬の火の傍に座ろう  
甘い香りの木 あなたの香り  
あなたの愛の炎  
御手がかき集めてくれる  
絶望の灰

オーマよ

わたしは命令されていた

スペイとして明るいモンテヴィデオへ行けと

あなたはホテルのロビーで見るだろう

新聞に見いつているわたしの姿

パイプに煙草を詰め

口笛を吹いたり

花屋で立ち止り

恋人を待つふりをした

教会では目立たぬよう

美術館では

軽めのツィードジャケットの

おとなしい旅行者

レストランでは気前よくチップを出す者と

秘密のプロファイルをつくりあげる

市民の

とても不安

特にあなたが

脅迫の主犯として手配されているので

安心 法律 そして命令を脅かすものとして

わたしの使命はあなたにキスすること

青酸カリをあなたに

含ませると

わたしたちの唇が離れる前に  
あなたは死後の世界に入るだろう  
そこで直ちにわたしと一緒になるだろう

オーマよ  
わたしに話しておくれ  
スペイン語で

英語で

自動的に訳そう

\* アイルランド語に

ナバホ語に

イーディッシュ語に

わたしは鳥人

空中では特別

行路が強制されている

あなたの口のそとにでて

母音 子音 記号になつて

わたしは奇妙なうごきを見た

あなたの舌の

あなたの口角が濡れている

すると次は

あなたは歯を押し当て

あなたの歯の間に入り

唇をかたちづくり

のどからの喉音

あなたの沈黙がわたしの存在を満たす  
底の流れがわたしを未知へと運ぶ

海の怪獣が  
生まれる  
氷の海に

\*ナバホ語 北アメリカのアメリカインディアン諸語のなかで最も話し手の多い有力な言語。

オーマよ

あなたはかつてスカアハ  
\*  
鎧の女王

英雄の指導者

影よりもすばやく

あなたの腕はぐいっと引き寄せる

あなたは恐れを知らず見つめ

あなたの的には両目に明らか

心の底からの

叫び声で

あなたは矢を放つ

わたしは瞬きするかしない先に

慈悲を乞う 許しを乞う

わたしのあばらの籠は粉々

あなたの矢先は

あなたを熔かし

あなたの形を造った坩堝の熱でいっぱいになる  
るっぽ

\*スカアハ ケルト神話で戦いの女神。

オーマよ  
 彼らはわたしを部族の仲間にした  
 ウルグアイの最後の原住民ネイティフ  
 こんなにも御身に仕えること  
 それは名誉というものだ

一万歳も老けたり  
 また若くなつたり  
 偉大なお祭りがある  
 バク 猿 ヤムイモー<sup>1</sup>  
 そこへあなたが招かれる  
 あなたのからだに絵付けしよう  
 別世界の模様だ  
 あなたはハンモックに横たわる  
 大蛇のいる木の下で

幻覚剤を飲み  
 蜂蜜を塗り広げたようなあなたの本質を  
 幻想から幻想また幻想へと探る  
 悲しげに鳴き叫ぶ極彩色のオウム  
 森の夜に

オーマよ  
さあ独りで事を終えるときだ

荒野のなかで

暗い水に反射する

あなたの光もないまま

ヒューヒュー鳴る風が  
汚らしいカラスを吹きあげる

あちらこちらに

紫色の陰鬱のなかで

思いつくままに

葦が次々にささやく

取るにたらぬものごとを

鼠は地上をうろつき回る

オーマよ  
あばずれの聖母が  
いま 抱きしめる

道で出会つても  
骨ばつた指で指ささないでくれ

しかめつ面 その怖い目は  
人々への

あなたはショールで身を覆う  
呴きながらその場を離れ  
苔玉の世界へともどる

わたしに何もいわず

潰傷がある熱っぽい脛を  
消えかけた石炭の熱で暖め  
わたしをここに置き去りにし  
あたりを見つめ見入らせる  
もう潮時だ

オーマよ

あなたを求めて歩きまわつた

乾いた茂み

もうシロアリは喰いつくしていた

巣穴を

わたしは夢幻鏡を回転させる

このときあなたはわたしの傍にいる

長くなつていく影

視界にカンガルーはいない

あなたの漠とした虚無

あなたはわたしに

巡礼魂を持たせてくれた

あなたはそれを大事と知つていた

最初の息吹きのそのときから

コウモリは去つていつた

夜は羽風の音が舞うばかり

オーマよ

もしもあなたが

興奮しやすいわたしの頭のトレッドミル

回り車の上にいる

鼠であるなら

あらゆる目に見える口から

目にみえない口を通して

わたしはあなたを噴出する

だがあなたはすつかりわたしと同化し

どうしてかわからないがわたしはあなたを吸い込み

あなたを取り入れ

あなたを摂取した

いまわたしは病にかかっている

炎だけが唯一の治療だ

闇の死が

わたしを肉みたいに焼いている

見限らないでおくれ

地上の業火だけが

わたしを破壊するのではない

オーマよ  
町のチンドン屋となつたことがある

夜中に触れ歩いた

御名を呼んで

このうえない喜び

猫も鼠もわたしの鉢を聞いて

佇んだ

搖ぎないわたしの声

しらふの霜を踏んで

多くの人がわたしを呪つている

高みから

多くはわたしの上で

尿瓶しづんを空にする

だけどわたしは御名を歌う

すると彼らは眠りに落ちる

互いの腕のなかや またひとりで

あなたの夢を見る

わたしは次の日の夜明けを告げる

オーマよ

地上に落下する雀はいない

すべては知られている

光のなかで

そして慈しまれる

お互いを知り

お互いを慈しもう

光のなかで大きくなろう

なんと光は明るすぎるのだろう

焼きつくし

盲目にするほど

少年のときスズメバチを捕つた  
それを拡大鏡の下に置いた

そうそして  
どうして忘れられるか  
光でそれを処刑したのだ

許しておくれ

わたしが苦むす影に  
あなたを見たとしても

こだまも帰らぬ落葉を敷詰めた小道

石や丸太

なめくじやカブトムシをけちらし

光のなかで驚愕させても

わたしは彼らを連れて飛び立とう

愛しい生命のための疾走だ

オーマよ

あなたは知つてゐる

捧げられた多くの歌があることを  
だがすっかりウイルスに飲み込まれ  
その過程で

次のものができ

ウイルスは賢くなつた

あらゆる方向へ またどこへでも広がつていく

電腦空間は

いまやあなたの薔薇の光で覆われて いる  
イヌイットのシャーマンは

ちかごろ月から戻り  
わたしたちの天の頌歌を語つてくれる  
それは最初の曙光ボレアリスのように

オーマよ

わたしは念入りに調べている

目の前にあなたが置いた障害を

工学的見地から

軍事的見地から

もうお手上げと思つた

わたしは詠唱する

あらゆる障害を克服するその人に向かつて

わたしは大声で歌う

ゲネシャ シヤラナム シヤラナム ゲネシャ

わたしはずつと誤った道をたどつて來た

あなたの温もりを求め急ぎ南へ

あなたの冷たさを求めぐずぐずと北へ

あなたの絵姿を求め東へと

あなたのまどろみを求め奥深い西へと

すべて無鉄砲な手段で

こんがり焼けたり 急速に凍つたり

目を開けたり閉じたり

アジサシのように既知の世界を一周した

あなたは一つ処にいなかつた

どうしてそなのだろ  
あなたは打ちふるえ  
御名のなかにいる  
わたしの名前は  
O オーム  
M という永遠のこだま

オーマよ

わたしは放浪の聖人

あなたへの道を彷徨う

放浪の聖人

ティンバクツーからのすべての道を

放浪せずにはいられない

これしか思いつかないのだから

わたしは放浪の聖人

あなたへの道を彷徨う

放浪の聖人

青い憂いを感じていると知れ

放浪せずにはいられない

これしか思えないのだから

わたしは放浪の聖人

あなたへの道を彷徨う

わたしは放浪の聖人

仲間もなく

ただ彷徨つてゐる

これしか思えないのだから

あなたを探すことからやりなおそう

オーマよ  
シマウマのように  
ひろい平野を駆け抜ける  
すべてのものは回帰する

地平線の向こうに沈む太陽  
だが沈むものは何もなく  
再び新しく昇らないものはない  
なにも老いず

死なず

忘れられることもない

カムフラージュは一瞬の曖昧  
見せかけの傲慢さ  
おおげさな別世界  
シマウマは柔らかな青草を大人しく食む  
輝かしい朝の栄光のうちに

オーマよ

その名前を初めて聴いたときの

あの衝撃

電気鰻を見つけたかと思つた

それを自分のものとしたかった

ショックで気づいた

いつも曖昧さや再現実があると

五十歳台も終わりとなつて

あなたは鰻のように現われたのだ

最深部よりのヒンズー修行者

わたしは獸のように毛を逆立てる

その宿命の確かさに

そんなに生き生きしたものではなかつた

あなたの時の力ほど

細胞から恍惚の細胞へと

わたしの中で絶えず動きくねる

オーマよ

\* ミラ星のよう

一日中詠唱して

<sup>\*</sup> クリシュナの影から離れない

蜂は眞面目に働きまわる

あなたの香りを吸いに

牧草地や野原で

熱心に甘さを吟味して

翅をもつて集まるものはみな善い

あなたの金の巣箱へ急ぎ戻り

あなたの兄妹姉妹に告げる

わたしは彼らを賛美する三つのシラブルを持つていると

\*ミラ星 くじら座( $\alpha$ -Cet)の変光星。最大光度は2.0等に達し、暗いときの千倍となる。

\*\*クリシュナ インド神話における最も民衆に人気のあつた神のひとつ。

オーマよ

彼らは冒涜する

あなたの地上の足音を知らないから  
あなたの心配そうな足取りを聴かないから

森の炎が火花をあげている後ろで響いているのに  
さあ今すべての小さな這うものよ

密林を跳ぶものよ

いつしょに

あなたの御名を唱えよう

彼らは冒涜する

あなたの地上の足音を知らないから  
電気鋸の近づくのを感じないから

あなたの突然の息吹を

さあ古代の精靈

灰と化した彼らの声よ

いつしょに

あなたの御名を唱えよう

オーマよ

秋には感覚を失つた

羊が立ち上る

霧雨のなか

弱々しい光に包まれて

わたしたちを救いたまえ

御名を唱える

渡りを知らぬ鳥が

枝葉のうえで狼狽する

憧れを

かれらは知らないのだ

オーマよ  
なにゆえに  
わたしは生まれきて  
あなたを褒めて歌う

あなたは  
わたしの魂の運命を  
鋤抜く

わたしを打ち鍛え給え  
どんな形にでも  
あなたの目が喜ぶなら

炎はゞ(うづ)うと音を立てていてる

オーマよ  
距離を保とう  
わたしたちの間

海と陸や  
冷たい森と

熱い砂漠  
暴れる川

踏みわたれない山々  
ゴボゴボいう沼の間で

わたしの憧れは  
あなたの慈悲

しかしわたしは  
有り余るほどのものをもつて  
いる  
だのになぜ願うのだろう  
もつとほしいと

慈悲がすべて  
それは目にはみえない  
障害や境界はないと知つて  
いる  
わたしが駆けていくのは 誰へか

わたしが逃げているのは 誰からか

これはどんな熱い森か

これはどんな冷たい砂漠か

手を差し伸べ給え

あなたの温かくて冷たい手を  
ゆつくりとあなたの掌を読む

あなたの過去を探し求めて

オーマよ  
花瓶の花を  
ごく近くに見れば  
突然わたしはあなたの骸骨を見る  
歯をむきだす髑髏から  
はぎ取られた肉体

なぜそんなあなたを見たのか

死の内の花  
花の内の死

どんなに優しく  
わたしは不可解な穴にキスしたか  
そこは少し前まで  
あなたの目が輝いていたところ

オーマよ  
わたしの友は蜘蛛だ  
いそがしく織つて いる  
紗のヴエールを

あなたはそれを着るだろうか  
見ればいつでも  
いつもそこにある

あなたの御顔を見られなくなつたら  
我慢ならない

蜘蛛よ 止めよ  
わたしたちができることはなにもない

九六

オーマよ

あなたのため に庭を造つた

素手で作つた

見てほしい

花 低木 小路 泉や木々・・・

とても面白いと

景観は

世界中の  
アーティストや園芸家に受け

オーマ迷路と呼ばれたが  
出口を見つけるのが難しい  
いちど見つけかけたが  
慌ててジャンプして 戻つた

オーマよ  
バヤジツドの  
癒されない渴えでなく  
予言者の祈りが  
いつもわたしの唇にあり  
なお喉が渴く

犬のように  
外に垂れた舌

眠っているのか起きているのか  
どちらともつかない

草から

あなたの露をいただく

風のうなり

わたしは雷雨をよびだす

あなたの雨でもつて  
外気が満ちる

止んだ後は  
木々の零  
あなたの音

わたしは聴く  
聴かないときでさえ

深い根から  
しみだしているのだ

\*バヤジッド　オスマン帝国の第4代スルタン。父が倒れた直後に即位。  
確立。中央アジアから小アジアに西進。捕虜となり最期を迎えた。

「雷王」のあだ名をもつ武人で、セルビアに宗主権を

オーマよ  
今朝わたしは  
世界記録を破つた  
あの潜水の

あなたは見たはずだ  
黄色 オレンジ 青い魚の群れが  
あなたの動きを表し 静かに嬉々と

しかしあたしは潜り続ける  
暗くなつてくる

不気味な静けさ

身体の中が破れると思つた

しかしそのときあなたの唇がわたしの唇に  
わたしは昇ってきた 息切れしながら  
空氣 それはあなたなのだ

オーマよ  
現象のなかにあなたを探す

一瞥のうちに  
ウズラクイナ

カツコウ

タヒバリを見つけるように  
あなたは何処にでもいる  
わたしは一日中走り回る

あなたを探す

あなたの沈黙のうちに  
わたしのために開かれた沈黙  
そこに居させ給え  
あなたの足元に落ちている  
林檎の花のように静かに

オーマよ

元はといえばあなたの名前だつた

口にできないものだつた

あなたに火をつけられた情熱

多次元への渴望

元素

銀河

季節

ゴロゴロという音が

バベルへ導く

活発で不活発なものが

あなたの音で開花する

あなたの光に死に

また生まれ来る

わたしに命を与え給え

あなたの神秘に近づかせ給え

サンショウウオが

あなたの炎から

じつと見ていく

オーマよ  
わたしは砂漠のなかにいて  
模様を学ぶ

横風が砂紋を作る

ここに来たのはあなたの存在が  
周囲は語ることのできない大混乱を引き起こしたからだ  
バス運転手がコースを忘れ  
清掃業者が水をこぼし始める  
どこもかしこも（詩の端切れ）

店が理由なく休み

目覚時計が夜中に鳴り響き

ミサの牧師が福音書でなく預言書を読み

勇気を讃えられた消防士が放火魔となつたり  
よく知られた犯人がヨガをしたり

実際コブラとして悪名高いヘロイン売りが  
いまやパラーブラキとなり

クリシュナのようにフルートを吹いたり  
製菓会社がすべての白ウサギを放出したり

裏街の売春婦が有機野菜を売つたり

この砂漠ではどんな徵も見る望みがない

横風は重なるように吹いている

御名のスペルをどうして知らせることができよう

オーマよ  
魂の明るい今宵  
夢のない港  
光景も  
音もなく

永遠に伸びる  
あなたの名前を  
綴る  
目に見えず  
銀河中に  
御名を唱える  
まだ生まれない星々から

オーマよ

わたしはパプアニューギニア人だつた

巨大なペニスサツクをつけ

あなたがこの高地に使命を帶びて来られたとき  
鏡で見せてくださつた

わたしは自分の姿を見て笑つてしまつた

あなたもわたしの手を取り

笑つてくださつた

創世記から

最後の晚餐に至る間ずっと

そして受難まで

わたしたちは食べ飲んだ

あなたはわたしの装飾羽根を御覧になり  
とうとう尋ねられた

キリスト教徒にはなりたくなかつたのかと  
あなたのためなら何教徒にでもなります  
ふたりの盗人の間で木に吊るされても  
あなたは浸礼を施してくださつた  
わたしはあなたのうちに生まれ変わつた

まさに翌朝

わたしはあなたに笑いを知らぬ祖先の骨を見せた  
あなたを知らずに一本また一本こなごなになつた

一〇四

オーマよ  
かすかな香り  
そよかぜのスイカズラ

線を描けるだろうか  
ここで止まれ

もつと遠くへ行つてはならない

宇宙に充满していないと  
すぐにつなぎの鼻孔に届かないだろう

スイカズラは

あなたの優しさを運んで飛んでいく

オーマよ  
わたしはプロイセンの役人だつた  
頬髭が褒めそやされた

申し分のない物腰  
立派な行儀

さらに銃撃手

戦略家  
戦争歴史家  
骨董収集家

有名な拳銃コレクター

馬はない

女もない

わたしを手なずける者はいない

あなたはわたしをスペイしていた

\* マタ・ハリみたいに  
踵をコツンとならし  
おじぎする前に

あなたの十字砲火につかまつた

わたしの知らない進路に  
どれだけ多くの日や夜が流れたことか  
(空白だ)

あなたはわたしをねじりあげ  
わたしの秘密全部を手にした  
いやひとつだけを残して  
それはあなたに曝け出すだろう  
あなたとの密会の静謐のうちに

\*マタ・ハリ 女スパイの代名詞にまでなったオランダの踊り子。パリでマタ・ハリと称した。スパイ容疑で死刑宣告を受け銃殺された。

オーマよ

ただただ思いの力によつて

わたしは鸚鵡に教えた

鶲鳴は止手くできな

嬰武は三ヶ月がたった  
かれは立ち聞きされてしまつた

わたしの迫害者により

## 破壊を受け

赤や黄色の羽  
巻りとられを

一  
三

かれは黙らなかつた  
絞首台で最後までガーガーないた  
あなたの尊ハ御名を

オーマよ  
 御目を開け給え  
 大きく  
 ヒュー  
 聴き給え  
 ヒュー ヒュー  
 わたしは風だ  
 あなたの寺院の門  
 ヒュー ヒュー ヒュー  
 迷つた白鳥  
 ヒュー ヒュー ヒュー ヒュー  
 瞳想から現れる  
 ヒュー ヒュー ヒュー ヒュー ヒュー  
 あなたの目から出る広大神聖な眠り  
 ヒュー ヒュー ヒュー ヒュー ヒュー  
 目覚めよ  
 あなたのくるくるまわる踊りの  
 最後の息に耳をあてる  
 ヒュー

オーマよ  
風は終わりなく歌うあなたの手足の疲れを  
渓谷は泣き叫び疲れた  
夜のうちに御名を  
行き来する亡靈は  
あなたの唇を探すゴースト  
心もとなく

オーマよ

あなたの御目の中には太陽がある

いや どうしてそうなのだ

あなただけ ひとり 太陽なのに

どんな造化のものをあなたは温めないといふのか

二足動物のもつとも低いわたしが

あなたの光を通してのみ生きられるのに

あなたの目の中の太陽

いや その神聖なからだは

五十億年も経つてしまった

閃光 「冬の野牛の息」

あなたの身体は、それでも・・・

オーマよ  
あなたのサギ師 あなたのコヨーテは

呼ばれていた  
あなたの広大さの中へ  
遥か海への

蒸發  
雲の果てでも  
星の果てでも  
わたしは驚かない

地上のわたしは知らなかつた  
荒々しい永遠の拡がりが  
優しく瞬き一つで  
投獄されるのを

空を解放せよ  
寂しく思う者のために  
口のきけないもののために

わたしは呑みこまれるものか  
わたしは呑みこむものか  
きらきら光る鼠捕り器

空を解放せよ  
収監されているもののために  
罪人のために  
賢人  
原野の獣たちのために  
大胆な詩人が  
御名を唱える

エピローグ

一

舌が使えるようになったとき

あなたを名づけた

あなたは別の舌をわたしに給うた

二つの目を持つたとき

千々の幻にあなたを見た

あなたは第三の目をわたしに給うた

耳を持つたとき

あなたの名前を数多く聞いた

いまそれは何ひとつない

あなたがどこにでもいることはなんてよいことか  
そしてどこにもいないことも

せめて せめて

わたしの傍にあなた

わたしはどこへもいかない

いまあなたを呼ぶ名はないどころか  
かたちさえないのだ  
だがあなたはいる  
かつて名づけられたことのあるものでなく  
わたしは二度とあなたに名はつけない  
わたしもまた  
そうだ　名なきものなのか

First published by Salmon Poetry

Translation by Mariko Sumikura

©Gabriel Rosenstock

アイル兰ノ文学交流助成作品：海外翻訳促進  
[www.irelandliterature.com/](http://www.irelandliterature.com/)

(ガブリエル・ローザンストック近影)



## 原作者ガブリエル・ローゼンストックについて

ガブリエル・ローゼンストックは一九四九年生まれ、アイルランドの詩人。現在はダブリン在住。百冊以上の本の著者であり翻訳者、そのなかには主にアイルランド語（ケルト語）による十三冊の詩集や俳句がある。アイルランド芸術文学アカデミー会員。彼はヨーロッパ、北米、南米、中米、インド、オーストラリア、日本で朗読を行い、多数の主要な国際雑誌で発表している。たゞ、『Akzente, Neue Rundschau, die hören』(Germany), Poetry (Chicago), World Haiku Review and Sirenaなどである。彼はまた有名なハルリン、フレーメン、ストルーダ、ヴァレンニカ、メアリーン詩祭で朗読を行っている。彼の詩選は（アイルランド語より）ドイツ語、英語、ハンガリー語に訳されている。

彼は多くの詩人の作品、たとえば、フランシスコ・アラルコン、ショーマス・ヒニー、ギュンター・グラス、W・M・ロゲマン、サイード、Zhang Ye、「ケーレ・ランチエッティ、マイケル・オーガスチン、ゲオルグ・トラーケル、ゲオルグ・ハイム、シェルテンライプ、ドーミン、タツメン、ムニール、ナジ、G・クネール、マイケル・クリューガー、ムハマド・イクバルおよび俳人一茶・蕪村・子規の俳句、山頭火をアイルランド語に訳している。J・W・ハケットなどのアイルランド語版は彼の本国でもたいへん愛読されている。ローゼンストックはアイルランド語の詩誌「THE SHOP」のアイルランド語顧問である。

彼の詩選 *Rogha Dánta* は一九〇五年に出版され、またバイリンガル詩集 *Bhain an Bhandé/Year of the Goddess* は一九〇七年に出版された。人生論としての俳句の一冊、*Haiku Enlightenment & Haiku, the Gentle Art of Disappearing* は現在ケンブリッジ研究出版より上梓されてる。ここで翻訳した「御名を唱えて」は英語で書かれた最初の詩集である。

この「御名を唱えて」はアイルランド文学交流財団翻訳出版賞の受賞作品です。原作者ガブリエル・ローゼンストック氏とはストルーガ詩祭で出会い、詩や意見を交換している際に本交流事業の対象作品であることを知らせていただきました。翻訳作業にとりかかったのは二〇一〇年の秋でした。その年夏は同詩祭に招待された詩人同士の友誼にしか過ぎませんでしたが、それがいまやアイルランド詩人と日本詩人と紐帶の証としてこの本が世に出ることになったことに感慨を覚えます。現代活躍する詩人を紹介することや詩人の交流を実現することは翻訳が伴いますので簡単な道ではありませんが、しかし進んでいく一步一歩に意義があると信じます。秋にはアイルランド大使館での著者との朗読も予定されています。関係各所の御支援に深く感謝する次第です。

この作品はポエトリーイヤイハナ（世界の神聖詩）によると「ミラバイのように偉大なるブハーキ詩のひとつだという強い印象を持つ」と書かれているように、ケルト神話のみならず世界の聖性を詩的に流浪する詩人の魂が描かれています。またロバート・ウェルチが「ガブリエル・ローゼンストックの詩は世界詩である」と書いているように、ひとつの場所やエートスにとどまつていらず、詩の自由さとはこのことであろうと思います。

翻訳に際しまして貴重なご意見を賜り完成に導いて下さいました村田辰夫先生（梅花女子大学名誉教授）には深く感謝いたしております。そして著者のガブリエル・ローゼンストック氏にはこのようなチャンスを与えて下さり、細かいことを何ども問い合わせるわたしに丁寧に教えて下さいましたこと、本当にありがとうございました。さらには米国の写真家ロン・ローゼンストック氏は表紙の写真の使用を快諾していただきました。皆様に感謝申し上げます。

また最後になりましたが、そして日本国際詩人協会の JUNPA BOOKS シリーズにて出版していただけました」と誠に光栄に思ひ、「に感謝の意を捧げます。

すみへぬめり

110 | 11年11月吉田

※日本国際詩人協会は本書「御名を唱えて」をアイルランド、ダブリンのアイルランド文学交流財団の助成（翻訳助成）を得て出版いたしました。www.irelandliterature.com  
info@irelandliterature.com

訳者　すみくらまりこ

1952年生まれ。詩人、エッセイスト  
著書・詩集『心薰る女』(2008)、『夢紡ぐ女』(2009)、『光織る女』(2010)、  
『愛装ふ女』(2010)、『地抱く男』(2011)以上竹林館。  
翻訳書・『御名を唱えて』(2012)、日本国際詩人協会 共訳書・『The Invisible  
Light』Silver Digital Imaging。マリア・サンブラーのに関するエッセイ多数。  
ストルーガ詩祭招待参加2010、JAN SMREK国際文学祭招待参加(2011)。  
所属・日本国際詩人協会代表理事。京都セルバンテス懇話会、日本詩人クラブ、関西詩人協会、  
現代京都詩話会、各会員。  
詩誌「詩の架け橋・天橋」、「PO」、「呼吸」同人



監修者　村田辰夫

1928年生まれ。梅花女子大学名誉教授  
著書・『T.S.エリオットと印度・佛教思想』(1998)。翻訳書・T.S.エリオット  
『F.H.ブラッドリーの哲学における認識と経験』(1986)、『三月兎の調べ』(200  
2)。  
共訳書・シェイマス・ヒニー『全詩集1966-91』(1995)、『水準器』(199  
9)、『電燈』(2006)、『郊外線と環状線』(2010)他。

詩集：『おもいの国土』（1974）、『わたしは鶴です』（1991）、『詩贊・大津絵』  
(2007)

所属：日本T.S.エリオット協会前会長、日本翻訳家協会常務理事、日本詩人クラブ、関西詩人協会、近江詩人会、各永年会員。詩誌「ラビーン」同人



### 御名を唱えて

平成24年10月20日 第2刷発行

著者 すみくらまりこ

定価 1500円（税別）

発行所：日本国際詩人協会

〒602-0862 京都市上京区河原町丸太町上る出水町262-202  
TEL/FAX 075-252-6328 <http://www.ama-hashi.co.jp>

〒591-8024 大阪府堺市北区黒土町227-2番3号

Mariko Sumikura

2012 Printed in Japan

ISBN 978-4-9905563-5-5 C0092  
定価はカバーに表示してある。

\*落丁・乱丁・印字不具合あればお取替えいたします。